

高千穂 神 楽

天孫降臨・天岩戸などの日向神話 日本神話の郷 高千穂

そこには この天孫降臨の伝承地を古くから守ってきた古社 高千穂神社や天岩戸伝承を伝える天岩戸神社などがあり、里人たちによって舞われる神話を主題とした神楽舞が数多く伝承されている



高千穂 神 楽

淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2017.9.23.





淡路島 伊弉諾神宮 神樂祭 2017.9.23.

高千穂神社

日本の創世記の様子を物語った日本神話は「古事記」（712年）、「日本書紀」（720年）、各地の「風土記」などにまとめられています。

「日本神話」その伝承地として知られ、天孫降臨の伝承地を古くから守ってきたのが高千穂神社。

平安時代以来1200年以上の歴史を持つ古社です。この地に数多くある神社の中でも格の高い88の神社を「高千穂八十八社」と言い、その「高千穂八十八社」の総社として信仰を集めてきたのが高千穂神社である。



日本神話(日向神話)伝承の地、高千穂には「天照大神が天岩戸にお隠れになったおり、岩戸の前で、あめのうずめの命が舞ったのが始まり」と伝えられる33番で構成された神楽舞が古くから伝承され、「高千穂の夜神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。古くからこの地方の秋の実りへの感謝と翌年の豊穡を祈願し、11月の末から2月上旬にかけて三十三番の夜神楽があちこちの神楽宿で奉納されます。

高千穂神社では 街を訪れる観光客などのため、毎夜 通常33番ある高千穂の夜神楽の中から、代表的な天岩戸開きにまつわる 手力雄（タヂカラオ）の舞、鈿女（ウズメ）の舞、戸取（とどり）の舞の3番とイザナギノミコトとイザナミノミコトが酒作りをユーモラスに演じる御神躰の舞、以上4番にまとめたコンパクトな観光夜神楽が公演されている

今回の淡路伊弉諾神宮での神楽祭りでも そんな中から「手力雄(たちからお)の舞」「鈿女の舞」「戸取(ととり)の舞」「御神躰(ごしんたい)の舞」の4番の舞が奉納されました。

高千穂神楽



「手力雄の舞」

「鈿女の舞」

「戸取の舞」

「御神祓の舞」

インターネット <http://www.pmiyazaki.com/takachiho/kagura.htm>より



◎ 手力雄(たぢから)の舞

手力雄の舞は、手力雄命が天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところをあらわした舞。

鈴と紅白の岩戸幣を持ったこの舞は、静と動の折れ合いが見事に調和した神楽舞いです。手力雄命が持つ岩戸幣には冠がついています。

青幣の山冠は天と水とを、赤幣の横冠は地と土を表し、分け幣の手では青幣を立て赤幣を肩に当てて或いは鈴を一緒に横にして舞われる。ここでは青幣が山、赤幣は畑の象徴と説明される。

しかし、ここでは鎮魂と復活という日神信仰を基調とする岩戸五番のなかの一つとして舞われることから「細女(うずめ)」のタマフリに対して幣を用いての天地の祓い神楽として解するのがよりふさわしいように思える。

「紫弓」「戸取」「舞い開き」を普通岩戸三番と称し、これに「伊勢」と「細女(うずめ)」を加えて岩戸五番という。「手力雄の舞」は本来伊勢神楽と同一の舞であり、三十三番の数に合わせて後に創案されたものである。同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面である。



◎ 細女(うずめ)の舞

天鈿女命(あめのうずめのみこと)は天の岩戸の所在がはっきりしたので、岩戸も前で面白おかしく舞い、天照大神を岩戸より誘い出そうとして舞う。

この天鈿女命の、天岩戸の前での舞いが、神楽の起源ともいわれます。

微笑みをたたえた女面に三段切りの御幣と日の丸の扇子(おうぎ)を持ち、素襦(すおう)の袖を巻き上げて優雅に舞われるこの舞は男神の力強さを象徴した手力雄命の戸取りとは対象をなす神楽である。



◎ 戸取(ととり)の舞

戸取明神(手力雄命)が天岩戸を開き、天照大神に再び出て頂く。これで又世の中に光が戻る事となる。

赤面に裁着袴、たすきを腰にはさみ杖を持った力強い手力雄の舞い。「ああら来たり大神殿、なんて出でさせ給わぬものならば、われ八百万神の神の力を出し一方の戸を取りて投げ捨つれば、伊勢の国は山田ヶ原に着きこなり。また一方の戸を投げ捨つれば、日向国橋の小戸の阿波木原にぞ着きこなり。その時日月さやかに拝まれ給ふものなりやあー」

唱歌しながら赤面の汗をほらい黒髪をふり乱し、渾身の力をこめて戸をはらう手力雄の舞は「細女(うずめ)」の女性らしい優雅な舞とは対照的な荒々しい力に満ちた男性的な神楽です。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面。これは戸取りという神楽の性格上、渾身の力をこめられるため面(おもて)が紅潮した状態を表しているそうです。



◎ 御神楽(ごしんたい)の舞

伊弉諾(いさな)命と伊弉冉(いさは)命 二神による国産みの舞といわれるが、本来は新穀感謝祭(新嘗祭・こしなめさい)を祝うために男女の神が新穀で酒をつくり、神前に捧げるお神楽で「酒おこしの舞」ともいわれる。

神道祭祀では、新穀、神酒を神前に供えて同じものを直会(なおらい)として人々が一緒に乾き、その行為を通して「神人一体」化すると信じられており、それが神楽御神楽のもつ本来の意味であり、男女二神の抱擁として表現されているものである。

男神は裁着袴に面をつけ餅を入れた葉巻を棒にさして担ぎ、右手の扇で棒をリズム良く叩きながら出て来る。男神が神庭を一回りすると愛敬のある女神が桶とザルをかついで男神に続く。二人そろって濁酒をこすことになるが、浮気心を出した男神は神楽見物の若い女性のところへ飛び込んで行き大騒ぎとなる。女神につれ戻され再び酒をこす作業がはじまる。太鼓の調子に合わせてブロックをしまい酒を飲み合ううちに酔った二人は抱き合って夫婦となる。



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭 2011.9.23.

高千穂神楽

「手力雄の舞」
「戸取の舞」

「鉦女の舞」
「御神跡の舞」



高千穂神楽 「手刀雄 たじからお の 舞」



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭で 2011.9.23.夕

高千穂神楽「手力雄 たじからお の 舞」 あらすじ

手力雄の舞は、手力雄命が天照大神が隠れている天岩戸を探し当てるところをあらわした舞。

鈴と紅白の岩戸幣を持ったこの舞は、静と動の折り合いが見事に調和した神楽舞いです。

手力雄命が持つ岩戸幣には冠がついています。

青幣の山冠は天と水とを、赤幣の横冠は地と土を表し、分け幣の手では青幣を立て赤幣を肩に当て或いは鈴と一緒に横にして舞われる。

青幣が山、赤幣は畑の象徴と説明される

「柴引」「戸取」「舞い開き」を普通岩戸三番と称し、これに「伊勢」と「鈿女（うずめ）」を加えて岩戸五番という。

「手力雄の舞」は本来伊勢神楽と同一の舞であり、三十三番の数に合わせて後に創案されたもの。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる神面は赤面である。



手力雄が天照大神を探しに行くところから神楽舞が始まり
天照大神の隠れておられるところを見つけます



天照大神を探す「手刀雄 たじからお の 舞」 (天岩戸の前の部分) 105S

高千穂神楽

鈿女^{うずめ}の舞



天岩戸の前で面白おかしく舞う天鈿女命



高千穂神楽「鈿女 うずめ の 舞」 あらすじ

天鈿女命（あめのうずめのみこと）は 天の岩戸の所在がはっきりしたので、岩戸の前で面白おかしく舞い、天照大神を岩戸より誘い出そうとす舞う。この天鈿女命の、天岩戸の前での舞いが、神楽の起源ともいわれます。

微笑みをたたえた女面に三段切りの御幣と日の丸の扇子（おうぎ）を持ち、素襖（すおう）の袖を巻き上げて優雅に舞われるこの舞は男神の力強さを象徴した手力雄命の戸取りとは対象をなす神楽である。



天岩戸の前で岩戸の前で面白おかしく舞う天鈿女命
鈿女 うずめの 舞



鉦女 うずめ の 舞 岩戸の前で面白おかしく舞う (部分) 85S

高千穂神楽「戸取りの舞」



高千穂神楽「戸取りの舞」 あらすじ

戸取明神（手力雄命） 天岩戸を開き、天照大神に再び出ていただく。
これで又世の中に光が戻る事となる。

赤面に裁着袴、たすきを腰にはさみ杖を持った力強い手力雄の舞い。

「ああら来たり大神殿、なんとて出でさせ給わぬものならば、
われ八百万神の神の力を出し一方の戸を取りて投げ捨つれば、
伊勢の国は山田ヶ原に着きにけり。

また一方の戸を投げ捨つれば、日向国橘の小戸の阿波木原に
ぞ着きにけり。その時日月さやかに拜まれ給うものなり
やあー」

唱教しながら赤面の汗をはらい黒髪をふり乱し、渾身の力をこめて戸
をはらう手力雄の舞は「鈿女（うずめ）」の女性らしい優雅な舞とは
対照的な荒々しい力に満ちた男性的な神楽です。

同じ手力雄の舞でも「手力雄」で用いる神面は白面であるのに対して「戸取」で用いる
神面は赤面。これは戸取りという神楽の性格上、渾身の力をこめられるため面（おもて）
が紅潮した状態を表しているそうです。



天岩戸の前で舞う手力雄



天岩戸の前で舞う手力雄



いよいよ天岩戸を開けにかかる



開いた岩戸を高々ともちあげる



開いた岩戸を高々ともちあげ、舞う手刀雄



岩戸を開き、舞う手力雄

高千穂神楽「御神躰の舞」



高千穂神楽「御神躰の舞」 あらすじ

伊邪那岐命と伊邪那美命二神による国産みの舞。

本来は新穀感謝祭（新嘗祭）を祝うために男女の神が新穀で酒をつくり、神前に捧げるお神楽で「酒おこしの舞」ともいわれる。

神道祭祀では、新穀、神酒を神前に供えて同じものを直会（なおらい）として人々が一緒に戴き、その行為を通して 神人一体化すると信じられており、それが神楽御神躰のもつ本来の意味であり、男女二神の抱擁として表現されているものである。

男神は裁着袴に面をつけ餅を入れた藁苅（わらづと）を棒にさして担ぎ、右手の扇で棒をリズムカルにたたきながら出て来る。

男神が神庭を一回りすると愛敬のある女神が桶とザルをかついで男神に続く。

二人そろって濁酒をこすことになるが、浮気心を出した男神は神楽見物の若い女性のところへ飛び込んで行き大騒ぎとなる。

女神につれ戻され再び酒をこす作業がはじまる。

太鼓の調子に合わせてドブクロをしぼり酒を飲み合ううちに酔った二人は抱き合って夫婦となる。



伊邪那岐と伊邪那美がでてきて、
酒をつくりをはじめるところから 舞が始まる

高千穂神楽「御神躰の舞」 酒造りを始めるイザナギとイザナミ



観客にちょっかいを出しに行くイザナギ





戻って また ふたりで酒づくり



造った酒を なかよく 飲みかわす



造った酒を飲みかわす 穏やかな空間



酔っ払って 寝てしまいうイザナギ イザナミは道具を片付ける



平々凡々 踊りながら 二人は退場する



高千穂

たかちほ

高千穂の夜神楽について

高千穂地方に伝承されております神楽は、天照大神が天岩戸に隠れた折に岩戸の前あまのつすのきもとで天鈿女命が調子面白く舞ったのが始まりとされておりまして古来私共の祖先は、永い間、高千穂宮を中心に、この神楽を伝承して今日に及んでおります。

昭和五三年に国の重要無形民俗文化財の指定を受け、昭和五五年にはヨーロッパで開催された国際伝統芸術祭に招待を受けるなど、全国各地で多くの公演を行っております。その伝承は遠く、神楽研究家の間では、平安末期から鎌倉時代にかけて成立したと言われております。高千穂の夜神楽は、毎年十二月の末から翌年の二月にかけて町内各地区にて三三番の夜神楽を夜を徹して奉納し、秋の実りに対する感謝と翌年の豊饒を祈願するものであります。

本日は、その中より、「手力雄の舞」たぢかうのお、「鈿女の舞」つすめ、「戸取の舞」ととり、「御神舩の舞」ごしんたいの四番の舞を公開いたします。



高千穂神楽

「手力雄の舞」

「戸取の舞」

「鉦女の舞」

「御神跡の舞」

[end]



淡路島 伊弉諾神宮 神楽祭

2011.9.23.